

スペイン語演習(上級)の開講

坂野鉄也 Tetsuya Banno
滋賀大学 経済学部 / 教授

2018年度春学期よりあらたに上級クラス「スペイン語演習(上級)」を追加開講した。

教育の方法について、おおよそ三種類、ラテン語であらわすならば、educatio、formatio、institutioがあると思われる。英語のeducationの語源であるeducatioはその動詞educo(直説法現在一人称単数、以下同じ)に表されるように、「教育」の「育」の側面が強く、少し離れたところから見守り、その能力を引きだすというニュアンスである。formatioは動詞にするとformoであり、ある形に仕上げるという含意である。最後のinstitutioの動詞はinstituo、教え授けるといふ意味である。

もちろんあらゆる教育がこれら三つの複合であるといえるが、外国語教育ではformatioの要素がどうしても強くなる。しかしこのクラスは、educatioが強いものとなった。

これには上級クラスの誕生にまつわる要因がある。この授業の原型となったのは、筆者着任2年目(2009年)に本学の国際交流協定校であるメキシコのグアナフアト大学での交換留学から戻った2人の学生との自主的な勉強会である。せっかく、メキシコに交換留学に行ったのだから、スペイン語を忘れたくない。ひいては、スペイン教育・職業訓練省によるスペイン語検定試験であるDELE (Diplomas de Español como Lengua Extranjera)の受験指導をして欲しい、と。彼らが帰国した6月から始めた勉強会の結果、一人の学生はDELEのB1を取得し、卒業後はグアナフアト州内の日系企業で働きはじめることとなった。近年は大学入試英語の外部試験の関係で認知度が高まっているCEFR (Common European Framework of Reference for Language ヨーロッパ言語共通参照枠)に準拠したB1というレベルは、日系企業の現地駐在員のレベルとして十分なものであった。

こうして始まった自主的な勉強会は、グアナフアト大学への交換留学生だけでなく、同じくグアナフアト

大学で実施される国際センター(現国際交流機構)主催の「メキシコ語学・文化研修」の修了学生が加わるようになり、多いときには10名以上が集うものとなった。そこで、自主的な勉強会から正規科目「スペイン語演習(上級)」として開講することとしたのである。

正規科目として開講する以上、従来の勉強会のようにそのレベル設定を曖昧なままとしておくわけにはいかず、ここでは「DELE B1, B2の合格を目指す」というレベル設定をした。如上のとおり、B1は日系企業の現地駐在員として勤務可能な能力水準であるが、B2はスペイン語圏の大学に正規の学生として修学可能な(EU内の大学間留学における基準にも適応される)語学能力である。

昨年度の春・秋学期ともに履修者は研修修了者、スペイン語圏への留学希望者、グアナフアト大学交換留学からの戻ったものとおおよそ三つのグループ、聴講を含め7名の履修者であった。

昨年度は春・秋学期をつうじて「書く」ことを前提としつつ「読む」ことに焦点をあてた。どのように書かれているのかを分析的に読むという訓練を積むことによって「書く」ことに応用していくという設定である。また、スペイン語で書かれた「文章の書き方」というエッセイも教材とした。これであれば、三つのグループに対応した講義となると目論んだのである。

通常、学生間のレベルに差があるばあい、語学の講義が難しいと考えられるが、少人数であったこともあり、履修生はそれぞれのレベルでその能力を伸ばすことができた。上位レベルの学生からはDELEのB2の合格者が出たし、スペイン語圏への留学希望者が履修後に語学学校へ入学した際、スムーズに授業に入っていたようである。また、下位レベルの受講者も確実に力をつけた。

その鍵となったのは、上位レベルの履修者が積極的に授業を牽引してくれたことにある。彼女たちは自らの学習経験において、何に戸惑い、また何が理解



2019年度春学期の授業風景

できずに困ったのかをその体験を具体的に話し、下位レベルの履修者たちに理解できないことが仕方がないことであると知らせると同時に、それを理解したときにどのようにスペイン語の見え方・捉え方が変わるのかを示してくれた。

また、基本的に講義内においては日本語を用いていたが、ときにはスペイン語で授業が進むこともあった。ここにおいても、メキシコ交換留学・スペイン語圏語学留学経験者が積極的にかかわってくれた。そのおかげで、留学未経験の履修者に留学によってたどり着ける能力がどの程度のものであるのかをわかりやすく提示してくれることになった。

こうしたことは授業外での効用にもつながった。これから留学しようとする履修学生とすでに留学した履修学生とのあいだで、留学やスペイン語学習にかんするさまざまな情報のやりとりがあったようである。

聴講する学生がいたことから分かるように、この講義は単位取得を目的としたものというよりも、履修学生個々が自らのスペイン語能力を維持・向上させたいという意欲のもとに参加している。そのため、相互にその能力を伸ばし合うという活動が授業の内外で生じたと考えられる。

二年目の今年度春学期の履修者は聴講を含め5名であった。スペイン語に似たポルトガル語を母語

とするブラジル国籍の学生が加わったこともあり、今年度のテーマは「話す」ことを前提とした「聴く」として、web上に存在するさまざまな映像資料、たとえばスペイン語母語話者が作成したビデオやニュース映像等を教材とするとともに、いかなる表現が好んで使われるのか、世界の20カ国以上で使用されるスペイン語の地域差という視点で授業を展開した。加えて、授業内の主たる言語をスペイン語とするとともに、各授業の最初にスペイン語圏音楽の歌詞を音読する時間を設けた。ここにおいてもやはり、上位レベルの履修者が流暢に音読したり、積極的に話すことによって授業が活性化された。

もともと自主的な勉強会に端を発する「スペイン語演習(上級)」の授業は、自らのスペイン語能力を維持・向上させたいと希望する意欲的な学生が集う場となっている。履修学生それぞれが意欲的であり、かつ担当教員が履修学生個々のレベルを十分に把握しているという条件下においては、受講者のレベル差は障害にならず、むしろ相互に刺激し合うという学習がおこなわれた。教員はコース・テーマを設定し、教材は準備するものの、積極的に教え込むというよりも、履修学生間の学習を少し離れたところから見守るという形となった。まさに、educatioである。